

特殊教育学会第11回大会(48年10月,岐阜大学)及び日本教育心理学会第15回総会(48年10月,福岡教育大学)において報告され,また,昨年までの研究の成果は,富安

によって「精神遅滞者の適応行動の構造 1 因子分析の試み」としてまとめられ,特殊教育学研究に投稿されている。(12月19日)

最近の研究経過報告 丸井文男

1. 自閉症研究

本紀要17巻以来,4つの論文をグループとして報告してきた。

本年度は,次の課題についてとりくんできた。

1) 数年来,継続して追求してきた自閉症症候群についての新しい類型化の研究は,最も大きな課題であり,現在もその体系化に努力中である。

2) NAUCL 及び NAUDS の作成。上記の研究に関連し,今回,自閉症症候群を治療過程から分析するための共通的,基本的資料として,2つのカルテ及びスケールを作成した。

NAUCL は,追跡用の詳細なカルテであり,NAUDS は,治療過程において,その都度,症候群の変化,発達について評定するためのスケールである。これらは,今後のこの分野の研究に,可成り有用なものと考えている。

3) われわれのクリニックでかかわってきた自閉症児の数は,約40名を越える現状であるが,症児の治療がすすむとともに,幼稚園(又は保育園)や小学校へ進む年令に達し,集団への適応ということが臨床的,現実的な課題となってきている。現在は,殆どどの症例が何んらかの集団に参加が出来るようになってきている。しかし,それまでの過程において,大部分の症児について,治療担当者は,園又は,学校へ出向き,状態像の説明とともに,受け入れや指導方針について協力をお願いして,出来るかぎり集団適応の状況の把握にもこころがけてきた。

今回,第1報告として,集団適応の現状を把握し,将来の指導方針の確立に近づく手がかりを得ようとしてき

た。その成果は,次回21巻に掲載する予定である。

なお,この研究をすすめるための共通理解を深める目的で,6月に10数名のグループメンバーで,武蔵野東幼稚園への一泊の見学旅行を行なった。つとに,その名の高かったこの園での見学は,われわれに多くの知見を与えてくれた。

2. Mental healthy personality の研究

昨年来,5名のグループで,高校生の精神健康度の研究をすすめている。現今の高校生は,その学校の格差とともに,大学進学率の増大に伴い,自殺者の増加や,意欲減退傾向者の増加がみられる。これは大学入試制度のみでなく,多面的な角度からのこの成因の解明と指導助言の方式の確立が必要と考えている。

そこで,Herzberg,F.が職場人に対する研究によってたてられた Motivian—Hygiene 理論を,高校生に延用することを考えた。

予備調査の検討は,昨年来,数高校の生徒を対象にして,実施してきた。

しかし,現状では,Herzberg 理論をそのまま高校生にあてはめて研究をすすめる研究方法を明確にしてゆくことにいくつかの障害があることがわかった。これを克服するために今後なお方法論的検討をすすめてゆく所存である。

3. 3年前から治療を継続してきた自己催眠現象時における犯罪行為を発生した稀有な事例については,予期以上の成果を得たので,次21巻に詳細に掲載する予定である。

内田良男

本年度は特に著しい成果はない。下記事項については継続する。

1. 統計数理について
2. 教育統計について
3. 検査法について

つぎの事項については,調査・研究の結果を1965年に

報告したが,その後の情勢を考慮し,さらに検討すべきであるという状況であり,その準備を始めた。

4. 統計教育について

なお,本年度は「一宮市青年実態調査」(委員長名大教育学部 教授 小堀勉)に協力している。報告書完成は来年度の予定。(1973年12月20日)